

国際耕種が考える「資源管理」とその「技術開発」＜その 8＞

地域資源活用型畜産～家畜は何を生産しているか？～

近年、気候変動対策の議論において、農業から排出される温室効果ガス、とくに畜産由来のメタンや一酸化二窒素への対策が課題となっている。そのため、畜産は環境負荷が大きい産業として否定的に捉えられることも少なくない。一方で、AAINews132号で紹介したリジェネラティブ農業の考え方では、家畜を農地や生態系に適切に組み込むことで、土壌や植生、養分循環などの維持・再生に果たす役割があることにも、改めて注目が集まっている。

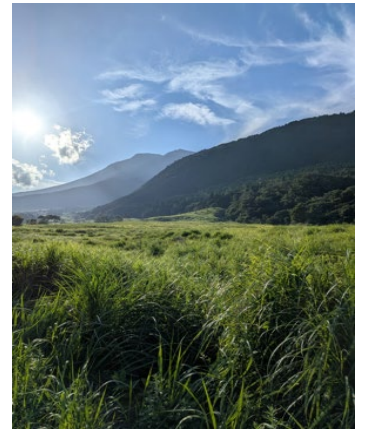
筆者は現在、大分県竹田市の久住山麓の集落で、近隣農家と共同で10頭ほどのヤギとヒツジを飼育している。もともとは羊毛の利用やペットとして飼い始めたのだが、人の手だけでは維持が難しくなった農地を、動物の力を借りて管理しよう、遊休地での放牧を行っている。



セイタカアワダチソウが繁茂していた遊休地で放牧を始めて1年。多様な雑草が生えてきた

筆者の住む地域では、平坦地が少なく田畑の規模拡大が難しいことから、限られた農地や山林を活用し、和牛の飼育と稲作、シイタケ栽培などを組み合わせた複合経営が営まれてきた。豊後大野市朝地町温見地区では、こうした地域条件を生かしたクヌギ林での林間放牧が現在でも行われている。クヌギはシイタケ栽培のホダ木（原木）として利用される。5月から11月にかけて、牛たちはクヌギ林に放牧され、林床の野草やササなどを採食する。牛が舌を使って下草を食べる、いわゆる「舌刈り」により、林内管理の労力が軽減され、シイタケの原木栽培に適した環境が維持されている。

また、竹田市久住町は大分県内有数の肉用牛生産地域である。久住高原には、古くから野焼きや放牧、採草によって維持されてきた草原が広がっていた。高度経済成長期以降は、肉用牛振興を目的に、国や県の草地開発事業により大規模な草地が整備された。現在も草原を維持するための野焼きや飼料用の採草が行われ、一部では放牧も続けられている。



阿蘇くじゅう国立公園に指定されている久住高原の草原景観

「里山畜養」という言葉をご存じだろうか。これは、北海道白老町のイコロの森で提唱されている考え方である。筆者の解釈では、家畜を肉や乳を生産する動物としてだけでなく、里山の管理を担う存在として捉えるものであり、採食や移動、排せつといった家畜本来の行動や特性を活かしながら、草地や森林、遊休地を維持・再生していく営みを指す。

先ほどの事例を「里山畜養」の視点から見てもよい。朝地町の林間放牧では、牛が下草を食べることでクヌギ林の管理が促され、シイタケ栽培を支えている。久住高原では、牛の飼育と結びついた野焼きや採草、放牧が続けられることで、草原景観と多様な草原生態系が維持されてきた。このように、家畜は畜産物を生み出すだけでなく、その飼育をめぐる人々の営みを通じて、地域資源の管理にも関わる存在として捉えることができる。

地域にはそれぞれ、固有の資源や十分に活用されていない資源がある。それらの資源を生かすために、どの動物に、どこで、どう働いてもらうのか。その組み合わせを考えることもまた、地域資源を生かす一つの技術であろう。